広島大学総合博物館研究報告 Bulletin of the Hiroshima University Museum 10: 103−110, December 25, 2018

資料 Data

広島県西条盆地南部，柏原・三升原地区の神社境内の石造物の同一性とその成立経緯

岩佐佳哉[1]・熊原康博[2]

The identical stone monuments in two separate shrines in Kashobara and Sanjobara, southern part of Saijo Basin, Hiroshima Prefecture, SW Japan, and the process of its establishing.

Yoshiya IWASA[1] and Yasuhiro KUMAHARA[2]

要旨：本研究では，広島県西条盆地南部にある，約 3.2km 離れた柏原地区の稲生神社と三升原地区の稲荷神社の境内にある石造物の形状や基数，刻文の比較を行い，両神社内の石造物の構成がほぼ一致することを明らかにした。その原因を明らかにするため，広島県立文書館所蔵の古文書の分析から，両地区や両神社に関する成立経緯を検討した。その結果，両地区が広島藩の主導により同時期に成立した化政期の新田開発地であること，新田開発を進めた藩の役人や賀茂郡内の割庄屋が両地区で同じ人物であり，彼らが神社建立の寄附を行ったことが，両神社内の石造物の構成が一致した原因であることを明らかにした。両神社の位置が入植前の村の境付近にあることから，神社建立の目的は，豊作の祈願だけでなく，近隣の異なる地区から入植者した人々を束ねる，紐帯のシンボルとしての目的があったとみなせる。これらの石造物の存在は，新田開発が両地区で同時に行われたことが忘れ去られている今日，両地区の歴史を伝える貴重な文化財といえる。

キーワード：新田開発，石造物，西条盆地，3 次元モデル，神社

Ⅰ．はじめに

本稿は，東広島市西条盆地南部にある，約 3.2km 離れた柏原（かしょうばら）・三升原（さんじょうばら）両地区の 2 つの神社の境内にある石造物の形状や基数，刻文の比較を通して，両神社境内の石造物が同一であることを示す。また，同一性の原因が両地区や両神社に関する成立経緯に由来すると考え，広島県立文書館所蔵の古文書の分析を通じて検討する。両地区では江戸時代後期，化政期に新田開発が行われており，神社の建立もこの時期に行われた。

研究の方法は以下の通りである。1）両神社境内の石造物の形状，基数，刻文の判読，記載を行った。判読に際しては，石造物に直接紙を当てる拓本の手法ではなく，内山ほか（2014）が行った SfM（Structure from Motion）-MVS（Multi-Video Stereo）技術を応用した非接触による方法を用いた。これにより石造物を汚損させることなく，3 次元モデルをつくることができ，文字の掘り込みを陰影により強調させることで，刻文を明瞭に判読できる。2）広島県立文書館が所蔵する「国郡志御用書上帳賀茂郡柏原　ひかへ」（竹内家文書，登録番号 198801/1908，以下「書上帳」とする）・「国郡志御用書出帖　賀茂郡三升原」（竹内家文書，登録番号 198801/6630，以下「書出帖」とする）を用いて，この地域の新田開発の進展過程を検討した。両文書は 1825（文政 8）年に刊行した広島藩全域の地誌「芸藩通志」を編纂する基礎資料となった文書であり，「芸藩通志」の内容よりも詳細に書かれている[1)]。両文書の正本は，1819（文政 2）年 5 月以降に広島藩へ提出したとみられ，現存するのは控えである。両文書が執筆された時期が，ちょうど柏原・三升原両地区の新田開発が進められた時期にあたるため，新田開発初期の進展過程や神社を勧請した経緯について把握できる。

1 広島大学大学院教育学研究科大学院生；Graduate student, Graduate School of Education, Hiroshima University
2 広島大学大学院教育学研究科 ＊責任著者；Graduate School of Education, Hiroshima University

ところで，新田開発に関する研究で，開発の進捗状況と神社境内の石造物との関係を扱った研究はない。古文書の記載内容が，実際の石造物に刻まれていることは，地域の歴史を学ぶ地域学習において，史実の内容を補強する効果が期待される。また，この地域の新田開発に関する研究は限られる。鈴木（1984）は，江戸時代後半の新田開発の一事例として，三升原の新田開発について簡単に整理している。土井（2016）は，化政期における広島藩の窮迫財政の立て直しの一事例として三升原地区の新田開発を取り上げているが，新田開発について具体的に検討したものではない。熊原（2017）は，柏原地区を事例として新田開発の水利の特徴を地形との関係から明らかにしているが，新田開発と神社との関係は触れていない。

II. 研究対象地域及び神社の概観

本研究で対象とする柏原地区と三升原地区は，東広島市西条盆地南部にあり，黒瀬川を挟んで西側に柏原地区，東側に三升原地区があり，共に段丘面上に立地する（図 1）。柏原地区は，北を黒瀬川支流の古河川，南を同じく黒瀬川支流の小田山（こだやま）川，東を黒瀬川本流，西を低い山地に囲まれた段丘面上に位置する。この段丘面は南西端を扇頂とする小田山川が形成した扇状地が段丘化したものである（熊原，2017）。三升原地区は西と北を黒瀬川本流，南を黒瀬川支流の松板川，東を山地に囲まれた段丘面上に位置し，本段丘面は松板川が形成した扇状地が段丘化したものである。

両地区とも『日本歴史地名大系第三十五巻　広島県の地名』（1982 年，平凡社）によれば，化政期に新田開発が行われたことを契機に成立した集落である。なお，三升原地区の南部に位置する黒瀬（現東広島市黒瀬町）・広（現呉市広町）と四日市（現東広島市中心部）とを結ぶ往還が地区の南北を貫いており，往還に沿って 49 戸が市町を形成していたという（後藤，1982）。

対象とする神社は柏原地区の稲生（いなり）神社と三升原地区の稲荷神社である。柏原の稲生神社は柏原地区中央部集落内の近世の田口村と小比曽村の境界に位置し，神社敷地の北西縁を北東に流下する用水路がある。稲生神社は，宇賀之御魂神や稲荷大明神など三神を祀る，五穀豊穣を祈願する神社である。一方，三升原の稲荷神社は，三升原地区西部集落内の近世の田口村と大澤村の境界に位置に位置し，用水路が神社脇を南西へ向かって流れている。この稲荷神社も稲荷大明神を勧請しており，五穀豊穣を祈願する神社である。

どちらの神社も集落内にあり，近世の村境界付近に位置し，新田開発に伴い整備された用水路脇に設置されていることが共通した特徴である。

Ⅲ．神社境内にある石造物の比較

ここでは柏原稲生神社と三升原稲荷神社の境内にある灯籠，手水鉢，鳥居，狛犬の特徴やその配置の比較を通して両神社の石造物の同一性を示す。

柏原の稲生神社の境内には 22 基の石造物があり，稲荷神社の境内には 36 基の石造物がある。このうち新田開発期に建立された石造物は，両神社とも 1 対の狛犬，手水鉢 1 基，灯籠 8 基，鳥居 1 基，計 12 基である（図 2）。それぞれの石造物には寄進者の名前や寄進した年号・寄進した内容が刻まれている。図 3 に石造物の刻文を示し，表 1 に石造物の刻文を記載した。以下では対応する石造物がどの程度一致しているのかを検討する。灯籠の番号は，古いものから順に付した。

1）灯籠　灯籠は寄進者と寄進した年月の刻文が全てで一致する。一方で台座部を除いた灯籠の高さは灯籠 6 以外で 2 ～ 28cm 異なる。ただし灯籠 2・灯籠 5 は修復された形跡があり，寄進した当時の大きさと異なる可能性がある。

2）手水鉢　手水鉢は寄進者と寄進した年月の刻文，形状や大きさのすべてが一致する。

3）鳥居　稲荷神社の鳥居は新しく再建されている。近くの住民からの聞き取りによると，平成に入ってから再建したとのことである。鳥居の柱に刻まれた文字については，寄進した年月と刻まれた人物名と役職名は，次の点を除いて一致する。石工の名が稲生神社のものでは「與」の文字，稲荷神社のものでは「与」となっている。また，寄進者名について，本来両者とも同じ多賀谷武兵衛であったはずである。しかし稲荷神社では「賀谷武兵衛」となっており，鳥居を再建する際に「多」の文字を誤って刻まなかったと考えられる。なお，寄附した池名は両者で異なるものの，池名の違いは，両地区で造築したため池の名前が違うことによる。

4）狛犬　狛犬は寄進者と寄進した年月の組み合わせが一致する。ただし狛犬の高さが稲生神社では 170cm であるのに対して稲荷神社では 160cm である。また，稲生神社の狛犬は互いに向き合うようにしているのに対して，稲荷神社の 2 対の狛犬はどちらも顔だけが鳥居側を向いている点が異なる。

両神社境内の石造物を比較すると，両神社の石造物は配置こそ違うものの，刻まれている寄進者の人名や役職，年代の組み合わせはほとんど一致する。これらの一致は両神社への寄進を一括して行なったことに起因すると考えられる。

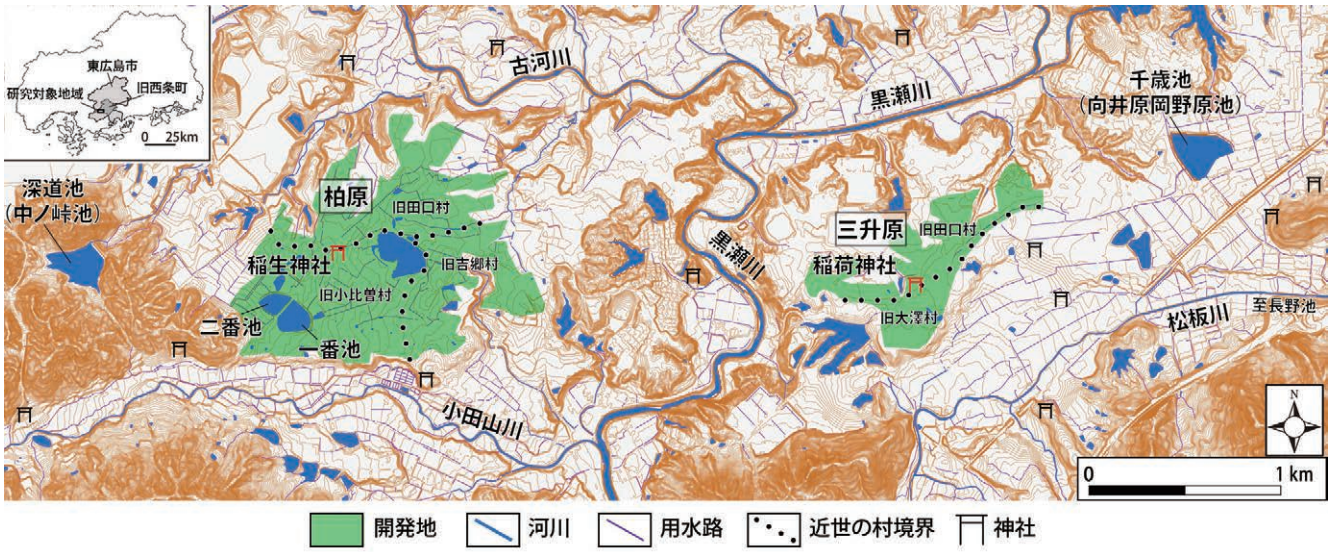

図 1　柏原・三升原地区の地域概観

等高線の間隔は 1m。等高線は国土地理院 5m メッシュ標高データを用いて作成。河川及び用水路の位置は基盤地図情報による。近世の村境界は広島県立文書館所蔵の絵図に基づく。主な神社の位置は地理院地図に基づく。赤色で表した神社は本研究で対象とする稲生神社と稲荷神社を示す。

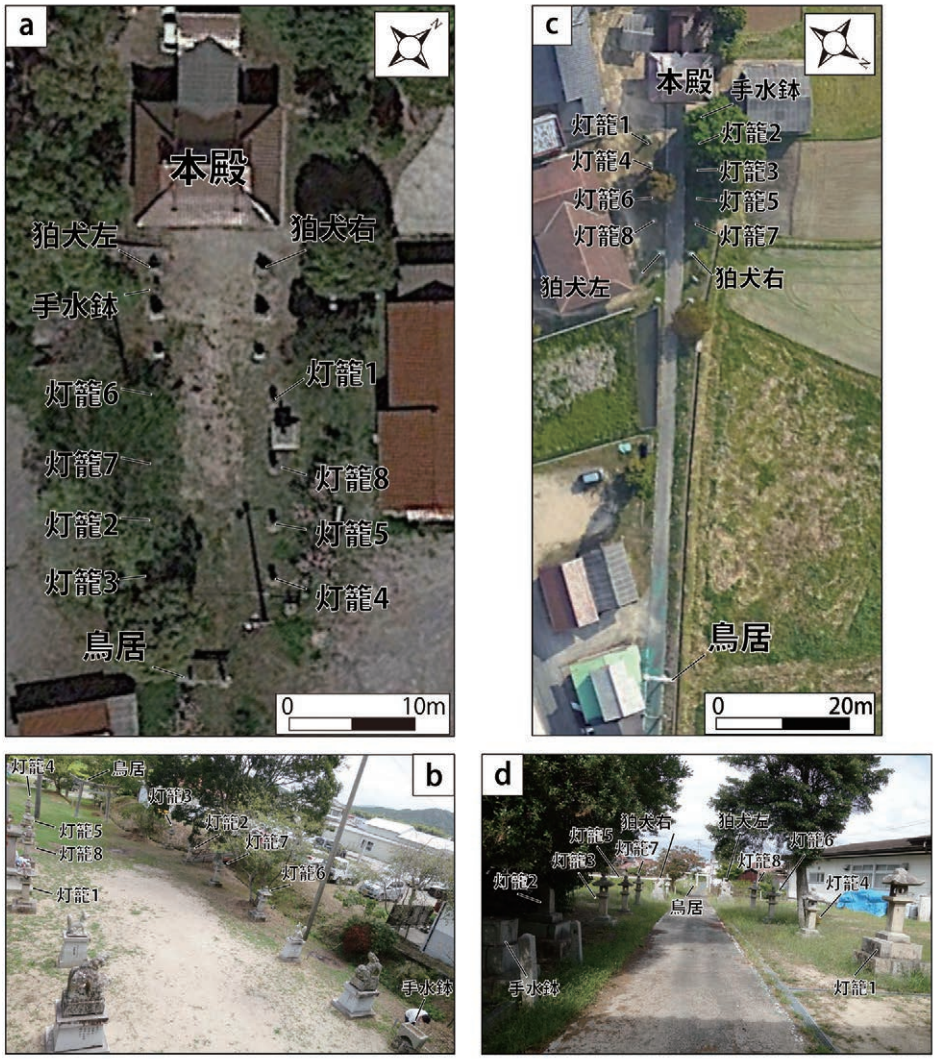

図 2　神社境内の石造物の配置と現地写真

a. 柏原稲生神社にある石造物配置，b. 柏原稲生神社境内の現地写真，c. 三升原稲荷神社の石造物配置，d. 三升原稲荷神社境内の現地写真。a, c の基図は Google Earth を使用した。石造物の位置は現地調査に基づく。

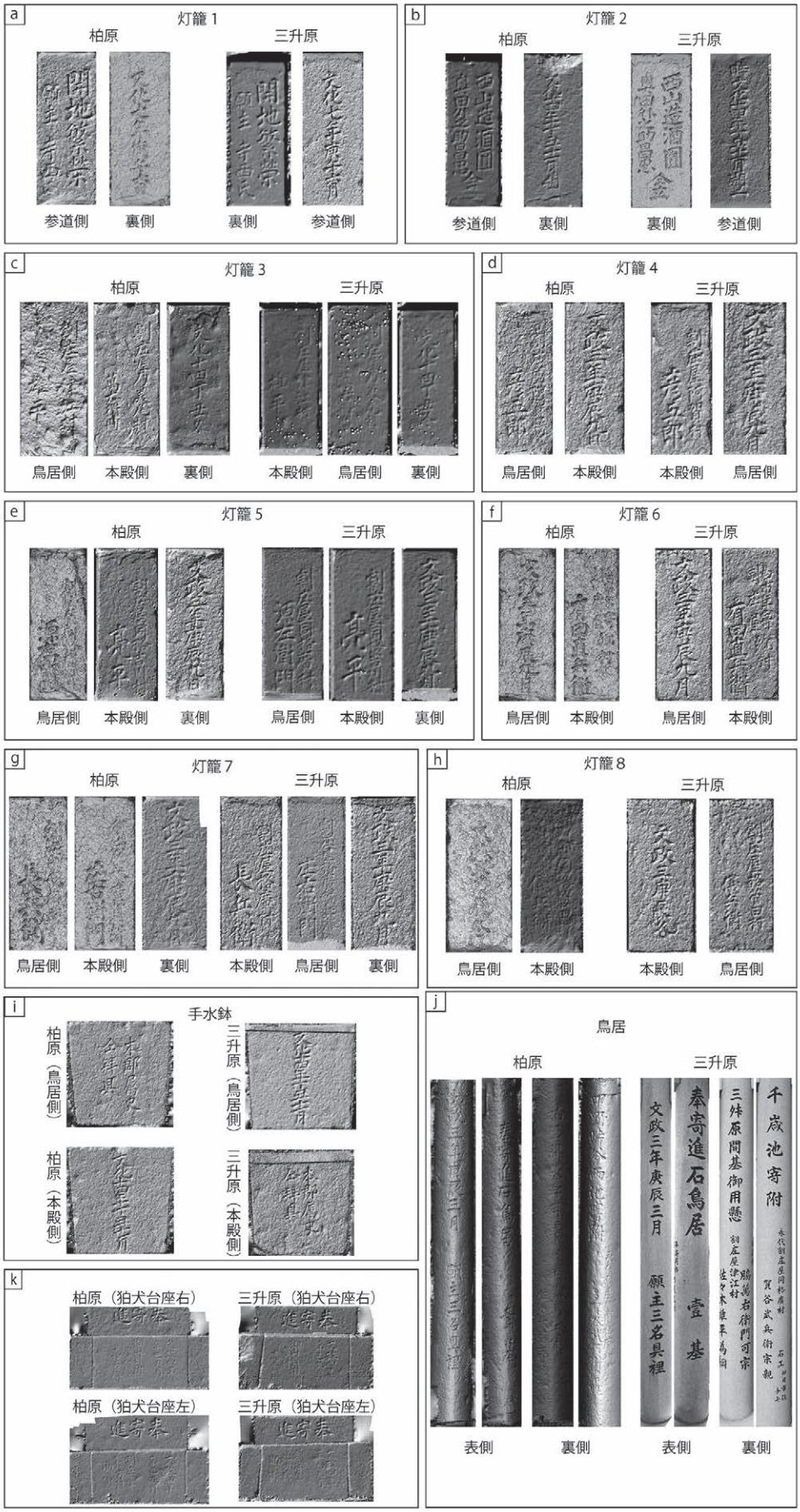

図 3　神社境内の石造物の 3 次元モデルおよび写真

a~h. 灯籠の竿の 3 次元モデル，i. 手水鉢側面の 3 次元モデル，j. 鳥居の 3 次元モデル（柏原）及び写真（三升原），k. 狛犬台座の 3 次元モデル

表１　稲生神社と稲荷神社の石造物の比較

		刻文		大きさ		相違点や気づき
		柏原稲生神社	三升原稲荷神社	柏原稲生神社	三升原稲荷神社	
灯籠	1	文化七年庚午六月，開地繁榮願主寺西氏		高さ147cm，竿の高さ56×横21cm	高さ145cm，竿の高さ56×21cm	石灯籠の高さが異なる。
	2	時文化十四年丁丑十一月朔旦，西山造酒圓奥田外之助昌忠仝立		高さ147cm，竿の高さ56×横21cm	高さ173cm，竿の高さ63×横21cm	柏原稲生神社の碑文は判読困難 石灯籠の高さが異なる。
	3	文化十四年丁丑冬，割庄屋乃美尾村萬右衛門，割庄屋津江村雄平		高さ141cm，竿の高さ56×横21cm	高さ150cm，竿の高さ56×横21cm	石灯籠の高さが異なる。
	4	文政三年庚辰九月，割庄屋阿賀村彦五郎		高さ161cm，竿の高さ56×横21cm	高さ150cm，竿の高さ56×横21cm	石灯籠の高さが異なる。
	5	文政三年庚辰九月，割庄屋同格廣村源左衛門，割庄屋同格吉川村亮平		高さ138cm，竿の高さ56×横21cm	高さ156cm，竿の高さ56×横21cm	石灯籠の高さが異なる。
	6	文政三年庚辰九月，白市年寄割庄屋郷村有田直兵衛		高さ150cm，竿の高さ56×横21cm	高さ150cm，竿の高さ56×横21cm	
	7	文政三年庚辰九月，割庄屋格廣村長兵衛，割庄屋廣村長濱庄右衛門		高さ132cm，竿の高さ56×横21cm	高さ160cm，竿の高さ56×横21cm	石灯籠の高さが異なる。
	8	文政三庚辰冬，割庄屋菅田村儀兵衛		高さ158cm，竿の高さ56×横24cm	高さ172cm，竿の高さ56×横24cm	石灯籠の高さが異なる。
手水鉢		本郡属吏仝拝具，文化十四丁丑十一月		大きさ幅36.5cm×横61cm×高さ36.5cm	大きさ幅37cm×高さ61cm×高さ37cm	
鳥居		（表側）奉寄進石鳥居　壹基，文政三年庚辰三月　願主三名具裡		高さ345cm，幅415cm	高さ404cm，幅450cm	三升原稲荷神社の鳥居は再建されている。多賀谷武兵衛の名前,寄附した池の名称，石工の名前の字体，石灯籠の高さが異なる。
		（裏側）中野峠谷雨池寄附　永代割庄屋同格廣村多賀谷武兵衛宗親　石工四日市住與七，柏原開基御用懸　年寄同格割庄屋乃美尾村脇萬右衛門可宗　割庄屋津江村佐々木雄平為綱	（裏側）千歳池寄附　永代割庄屋同格廣村賀谷武兵衛宗親　石工四日市住与七，三升原開基御用懸　年寄同格割庄屋乃美尾村脇萬右衛門可宗　割庄屋津江村佐々木雄平為綱			
狛犬		奉寄進，文政四年辛巳九月，（左）御山目附廣村喜三兵衛，（右）割庄屋仁方村助次		高さ170cm	高さ150cm	狛犬の高さと顔の向きが異なる。

灯籠の高さは台座部を除く。『国郡志御用書上帳賀茂郡柏原　ひかへ』,『国郡志御用書出帖　賀茂郡三升原』および現地調査により筆者作成。

両神社の境内には，文政４年以降の石造物も存在する。柏原稲生神社では大正８年から平成18年の間に10基，三升原稲荷神社では明治34年から平成25年の間に24基それぞれ建立されている。これらの石造物には同じものはない。開発が一段落した後の両地区はそれぞれの歴史を歩んできたといえる。

また柏原稲生神社には，先述した狛犬とは別の石造狛犬が一対ある。『東広島市の石造物』（2015年，東広島郷土史研究会石造物研究会）によれば，この狛犬は出雲型石造狛犬であり江戸時代に作られたものであるとされている。しかし同様のものが三升原稲荷神社に存在しないことから，文政４年以降に設置されたも

のである可能性が高い。

Ⅳ．柏原・三升原地区の新田開発と神社勧請

本章では，柏原・三升原両地区における新田開発と神社勧請との関係を，柏原の「書上帳」及び，三升原の「書出帖」の記載内容を基に検討する。

1．柏原・三升原地区の新田開発の進展

柏原・三升原地区の新田開発初期の年表を表2に示す。1808（文化5）年に郡奉行寺西監物が両地区を訪れ，その年の秋に唐櫨を植えることを指示した。しかし冬の寒さから1809（文化6）年の冬には多くの苗が枯れてしまった。同年の11月下旬には広島藩藩

表2　柏原・三升原地区における新田開発初期と両神社の出来事

西暦	和暦	干支	月日（季節）	出来事 柏原	出来事 三升原
-	元禄年間	―	―	楮畠を植えていたが，生育不良により楮株の栽培をやめ，牛馬の飼草のみ栽培	
1808	文化5	辰	4月	・郡奉行寺西監物・代官伴傳右衛門一行が柏原を見分	
					・畝数２町の畠の開墾が許可される
			夏		・百姓たちが自力で畠を開墾し，一部で蕎麦を栽培。楮や麻の植え付けも不調
			秋	・広島藩より「畠を開き，唐櫨を植えるのが良い」との指示 ・割庄屋乃美尾村萬右衛門，割庄屋津江村佐太郎を御用懸に任命	
			冬	・唐櫨植付	
1809	文化6	巳	春	・唐櫨植付	
			冬	・低温のため唐櫨の幹が枯れる	
			１１月下旬	・殿様（浅野齊賢）が鷹狩りの際に柏原・三升原へ立ち寄り，見分	
1810	文化7	午	―	**・神殿完成【半分は寺西監物、残りは御用懸り割庄屋・村役人・長百姓】**	
			6月	**・郡奉行寺西監物が稲生神社を勧請，御用懸割庄屋，吉郷村・福本村・寺家村役人，長百姓が出席。**	**・郡奉行寺西監物が稲荷神社を勧請，御用懸割庄屋，田口村・大沢村・寺家村役人，長百姓が出席。**
				・灯籠1を寄進 **・神殿棟札を御役所が作成**	
1811-1813	文化8-10		この期間について記載なし		
1814	文化11	戌	春	・西山造酒が見分し，奥田外之助との連名で「人々を移住させて開墾させよ」との発議	
			―	・入植希望者はなし	・５人が入植
			8月		**・拝殿完成**
1815	文化12	亥	―	・小比曽・大河内村の先庄屋清助らが入植 ・御勘定所郡御受荒木左助，賀茂郡御番組山本伊三郎が割庄屋萬右衛門・雄平と見分し，小田山川から新溝を作る計画をたてる ・吉郷村・田口村の百姓11人が入植	
			秋		・冬と春の余り水を，福本村・森近村・大澤村の奥山から三升原に引く溝完成
1816	文化13	子	春	・山本伊三郎の指揮で一番池，二番池完成 ・小田山川から柏原へ至る用水大溝完成	・山本伊三郎の指揮のもとで長野池完成【割庄屋吉川村六郎兵衛】
			秋	**・華表が風により破損し再建される**	
1817	文化14	丑	春	・山本伊三郎の指揮で三番池完成【割庄屋吉川村六郎兵衛】	
			夏	・中ノ峠池より柏原へ至る用水大溝完成【割庄屋吉川村庄屋嘉平太】 **・拝殿完成**	
			秋	・山本伊三郎の指揮で一番池増普請	
			11月朔旦	**・灯籠2を寄進**	
			冬	**・灯籠3を寄進**	
					・住居人や開地は増加
1818	文化15/文政元	寅	春	・児玉茂助の指揮で中ノ峠池８割完成【廣村庄屋多賀谷武兵衛】	・美輪傳蔵の指揮で向井原岡野原池６割完成【廣村庄屋多賀谷武兵衛】 ・下三永村末釜から向井原岡野原池，向井原岡野原池より三升原への引溝完成
1819	文政2	卯	春	・中ノ峠池完成【廣村庄屋多賀谷武兵衛】	・児玉茂助の指揮で向井原岡野原池完成【廣村庄屋多賀谷武兵衛】
			5月	「国郡志御用書上帳賀茂郡柏原」提出	「国郡志御用書出帖賀茂郡三升原」提出
1820	文政3	辰	3月	**・鳥居の寄進**	
			9月	**・灯籠４，５，６，７の寄進**	
			冬	**・灯籠8の寄進**	
1821	文政4	巳	9月	**・狛犬の寄進**	

太字は神社に関連する内容。【 】は寄進した人物。書かれていない場合は藩からの支出。『国郡志御用書上帳賀茂郡柏原　ひかへ』，『国郡志御用書出帖　賀茂郡三升原』および現地調査により筆者作成。

主，浅野齊賢（なりかた）が両地区に来訪しているので，おそらく苗が枯れている状況を見たのではなかろうか。その後5年間，両地区について何も記述がなく，1814（文化11）年になって，代官西山造酒が両地区に来訪し，居宅を自力で建設できる者を定住させ開墾することを推奨した。それを受けて，三升原への入植を希望した者の数は計5人だったものの，柏原への入植希望者はいなかった。翌1815（文化12）年には，入植者が藩に対して段丘面上では水が足りないので入植に不安であると訴え，その後，役人が訪れて見聞した。その後，ため池や用水路の造築が許可され，藩の支出で進められることになった。1816（文化13）年用水路や溜池の造築が進められ，段丘面上であっても用水を得て水田耕作を行えるよう整備されていった（熊原，2017）。つまり柏原・三升原両地区は広島藩の主導により同時期に成立した化政期の新田開発地であったことがわかる。

2. 新田開発と神社勧請の関わり

両神社の勧請が行われたのは1810（文化7）年である。この時期は唐櫨の植え付けが失敗した頃にあたる。この時期に神社が勧請・建立されたことは，当地区の豊作を祈願し，唐櫨の植え付けの成功を祈って神社が建立されたことを意味する。実際に両神社で最も早く灯籠を寄進した郡奉行である寺西監物の灯籠には「開地繁榮」の字が見て取れる（図3a）。また「書出帖」によると神殿の棟札の表に「奉勧請賀茂郡田口村大澤村三条原稲荷大明神唐櫨成立廣榮寺西監物平康義」と記されているほか，神殿の棟札の裏には灯籠2を寄進した御代官西山造酒圓，灯籠3を寄進した御用懸庄屋萬右衛門の名前が書かれている。

両神社は近世の村境界に位置している。これは村境界付近で行われた新田開発により柏原・三升原地区が複数の村にまたがって成立したため，両神社が一方の村の所有物にならないよう村の境界に勧請・建立されたと考えられる。両神社が一つの村の所有物ではなく，両地区の象徴としての役割を持っていた可能性がある。つまり柏原・三升原両地区の神社の勧請は，豊作の祈願や両地区の紐帯のシンボルとして入植者を束ねることを含めた，新田開発の成功を祈願する目的があったといえる。

「書上帳」と「書出帖」によると，1810（文化7）年6月に郡奉行寺西監物が稲荷大明神を稲生神社・稲荷神社に勧請し，灯籠などを寄付している（表1, 2）。上述のように稲生神社と稲荷神社の石造物の刻文の内容が一致しているほか，稲生神社と稲荷神社の完成は同時期である。両神社とも郡奉行が関わっていることから，藩主導で両神社が同時に作られたと考えられる。これは柏原・三升原両地区の新田開発を同時に進行させたことに起因するものである。両地区の新田開発を同時進行させたことの表象，痕跡として両神社の石造物の同一性を位置づけることができる。

1816（文化13）年に柏原の一番池，二番池，三升原の長野池が完成，1818（文化15/文政元）年には三升原の千歳池，1819（文政2）年には柏原の中ノ峠池が完成し，両地区の新田開発が進展している。両地区で最も大きな溜池である中ノ峠池と千歳池の造築に際しては，両神社に鳥居を寄進した多賀谷武兵衛が銀を寄附している。武兵衛は廣村（現呉市広）の新田開発など公共慈恵に注力し，藩の土木事業に貢献したことから生涯の苗字帯刀を許された割庄屋である（武岡・井口，1915）。現在も呉市広に多賀谷の地名があり，その名を残す。武兵衛は中ノ峠池・千歳池の普請への寄附により永代割庄屋同格と生涯の名字を許されている（呉市史編纂室，1956）。さらに長野池，一番池，二番池，用水路の造築や作肥について，灯籠3を寄進した萬右衛門・雄平，灯籠4を寄進した彦五郎，灯籠6を寄進した有田直兵衛，灯籠7を寄進した長兵衛・庄右衛門，灯籠8を寄進した儀兵衛が銀の寄附を行なっている。新田開発の進展に対応するように1817（文化14）年，1820（文政3）年には多くの石造物が寄進されている。両地区における開発の進展に伴い，開発への寄附者が集まってきたことから，新田開発の進展に伴い石造物が設置されたと考えられる。

V．まとめ

本研究では以下のことが明らかになった。

1）東広島市西条盆地南部，柏原地区の稲生神社と三升原地区の稲荷神社の境内の石造物（狛犬，灯籠，手水鉢，鳥居）の内，文政三年以前の石造物については，基数，形状，刻文ともに一致することを明らかにした。

2）両神社内の石造物が一致する理由として，両地区が広島藩の主導により同時期に成立した化政期の新田開発地であること，新田開発を進めた藩の役人や賀茂郡内の割庄屋が両地区で同じ人物であり，彼らが神社建立の寄附を行ったことを明らかにした。

3）両神社の位置が入植前の村の境付近にあることから，神社建立の目的は，豊作の祈願だけでなく，入植地における紐帯のシンボルとして近隣の異なる地区から入植者した人々を束ねる目的があったとみなせる。

3.2 km離れた神社内の石造物が一致するという事

実は，両地区の住民には知られていない。これらの石造物の存在は，新田開発が両地区で同時に行われたことを如実に伝える歴史的な文化財といえ，今後これらの石造物の存在とその意義を周知していく必要があるだろう。

Ⅵ．付記

柏原水利組合の高野正晴氏及び小玉邦男氏には，柏原地区の用水路や水利慣行に関する貴重な情報を提供いただくとともに，現地を案内していただいた。広島県立文書館の職員の方々には，柏原・三升原地区の絵図や古文書の撮影に際して便宜をはかっていただいた。また下向井龍彦広島大学名誉教授，広島大学総合博物館学芸職員の佐藤大規氏，広島大学大学院教育学研究科社会認識教育学講座の大学院生，教育学部社会系コースの学部生の方々には，文書の読解及び現地調査にご協力いただいた。記して感謝申し上げる。本稿の内容の一部は，地理科学学会春季学術大会（2018年６月２日）にて口頭発表を行なった。

Ⅶ．参考文献

武岡充忠・井口丑二（1915）：『廣村』警眼社発行.

呉市史編纂室（1956）：『呉市史　第一巻』呉市役所発行.

後藤陽一監修（1982）：『日本歴史地名大系第三十五巻　広島県の地名』平凡社発行.

鈴木幸夫（1984）：耕地の拡大と用水の発達．広島県編：『広島県史 近世 2』広島県，756-770.

内山庄一郎・井上　公・鈴木比奈子（2014）：SfM モデルを用いた三次元モデルの生成と災害調査への活用可能性に関する研究．防災科学技術研究所研究報告，81，37-60.

東広島郷土史研究会石造物研究会（2015）：『東広島市の石造物』

土井作治（2016）：『広島藩の地域形成』渓水社.

熊原康博（2017）：扇状地性段丘地形における新田開発の水利の特徴 - 広島県西条盆地南部，柏原地区を事例に -．広島大学大学院教育学研究科紀要, 第二部（文化教育開発関連領域），66，59-66.

弘胤　佑・下向井龍彦・熊原康博・佐藤大規・岩佐佳哉・竹下紘平・横川知司・氏原　秀・浅井詩織（2018）：19 世紀初頭の東広島市西条盆地南部，柏原における新田開発初期の進捗過程―「国郡志御用書上帳　賀茂郡柏原　ひかへ」の分析―．広島大学総合博物館研究報告，10（印刷中）.

註

1）「国郡志御用書上帳賀茂郡柏原　ひかへ」の内容については，弘胤ほか（2018）で詳しく述べている。

（2018 年 8 月 31 日受付）
（2018 年 12 月 5 日受理）